

イワキサンクジラの全身骨格を展示

連携展 岩木山の自然 ～クジラ化石と豊かな動植物たち～

連携機関・開催会場 藤崎町常盤ふるさと資料館あすか

青森県立郷土館では 1990 年 (平成 2 年) 秋、岩木山の南西麓を流れる中村川河岸でクジラ化石の発掘を行い、頭部と尾部の一部を除くほぼ全身の骨格化石が得られ、大きなニュースになりました。その後、このクジラ化石はイワキサンクジラと呼ばれ、これまで当館の常設展示室で一部を公開してきました。

今夏、藤崎町の常盤ふるさと資料館あすかを会場に開催した「岩木山の自然～クジラ化石と豊かな動植物たち」(会期：8月6日～9月19日)で、ほぼ全身の骨格化石を紹介することができました。来場者はその大きさと迫力に驚いていました。

イワキサンクジラは発掘当初、見つかった耳の骨(鼓室^{こしつぼう}胞)の形態的特徴からザトウクジラのなかまと考えられていました。ところが、その後の研究で下顎骨^{かagakこつ}の形態はナガスクジラのなかまに、腰椎や尾椎の形態はコククジラのなかまに似ていることがわかり、さらにその年代は 700 万年以上前と考えられ、現在も研究が進められています。これらの研究過程や発見から発掘までの経緯について、パネルによる解説を行いました。

同館と連携して開催した本展で、クジラ化石のほかに岩木山の成り立ち、植生の特徴、生息する動物についても紹介しました。(自然担当・島口)



イワキサンクジラ化石産状 (1990 年当時)



イワキサンクジラのほぼ全身骨格化石を展示



イワキサンクジラ化石
(胸椎、肩甲骨、上腕骨、
橈骨、尺骨)

連携展「岩木山の自然 ～クジラ化石と豊かな動植物たち～」

藤崎町常盤ふるさと資料館あすかで開催した展示内容とギャラリートークを紹介します。



兼平石

岩木山の成り立ち

岩木山は現在も活動している活火山であることと、その形成史を3期に分けて紹介しました。第1期から第2期の火山活動に関連する岩石標本として弘前市兼平地区で採石されていた「兼平石」を展示し、自然の状態で薄く割れていることから古くから敷石や板碑などに幅広く利用されていたことを紹介しました。

岩木山の植生の特徴

岩木山に分布する植物について植生帯ごとにパネルで解説しました。特に、岩木山には針葉樹林からなる亜高山帯がなく、代わりに落葉広葉樹の低木からなる偽高山帯が存在するという特徴について、氷期からの地史を踏まえた説を用いて紹介しました。

岩木山の昆虫

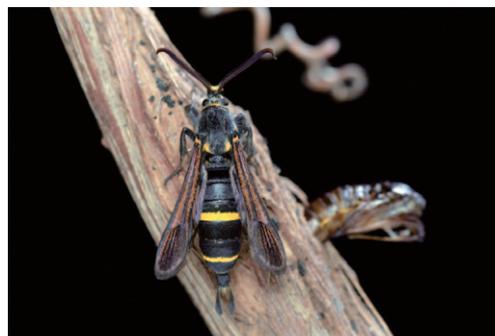
山地性昆虫やチョウ類などをパネルで解説し、昆虫標本を展示しました。標本の中には、見かけはハチにそっくりな蛾「スカシバガ」のなかまのミチノクスカシバとクロビロードスカシバがあり、前者は岩木山から、後者は岩木山麓の弘前市相馬地区で見つかった新種で、来場者はハチにしか見えない蛾の姿に感心していました。

岩木山の動物

哺乳類と鳥類の剥製を展示し、その生態や特徴を紹介しました。来場者は、ふだん間近で見ることのないタヌキやトビなどの剥製を見て、その毛並みや模様、羽や足の様子を確かめていました。



岩木山の特徴的な植物ミチノクゴザクラ(シロバナ)



はねを伸ばさず羽化直後のミチノクスカシバ(オス)
工藤忠氏 撮影



開催初日の
ギャラリートーク。
岩木山の哺乳類・鳥類の
解説をする片山研究員

9月9日の藤崎町内の中学生を対象にしたギャラリートーク。クジラ化石の解説をする島口学芸課長



ギャラリートーク

開催初日の8月6日のギャラリートークには、藤崎町内の方を中心に16名の参加がありました。また、9月9日には町内の中学校2校の2年生を対象に、主にイワキサンクジラの発見から研究までの過程とクジラ化石からわかることについて解説しました。解説を聞いた生徒たちは、岩木山の麓を流れる川でクジラ化石が発見されたことから、この地域を含む県域がかつて海だったこと、海底が隆起して陸地になったこと、クジラという生物の進化や分類について理解を深めたようでした。

(自然担当・片山)

巡回展「あおり旅ものがたり ～青森の名所と交通の歴史～」

昨年度に引き続き、むつ市（むつ来さまい館・8月11日～9月11日）・三沢市（青森県立三沢航空科学館・10月1日～30日）・青森市（青森県立美術館・11月23日～令和5年1月29日）で巡回展を開催。展示会の担当者に聞きました。



会場入口 三沢市（青森県立三沢航空科学館）



風景と観光名所・十和田湖の鳥瞰図を拡大

本展のみどころを聞かせてください

今回の巡回展は「旅」がテーマです。総合博物館ならではの豊富な資料と多角的な視点で、人と物が行き交い、旅の目的地でもある青森の魅力を各地で紹介する、まさに旅する博物館の展示になりました。

オススメ資料をいくつか教えてください

まずは空飛ぶ鳥の視点で名所や景勝地などを描いた観光案内図である、鳥瞰図ちようかんずです。その代表的画家で、大胆なデフォルメの構図で人気を博した吉田初三郎と、彼の弟子でのちに最大のライバルとなった金子常光が、県内各地を描いた鳥瞰図を紹介しています。

また、絵はがきも数多く紹介しています。県内の名所を写した戦前のものを展示しており、その風景のほとんどが今も観光名所として有名です。鳥瞰図に描かれている場所も多いので、鳥瞰図と合わせて見るとさらに面白いと思います。

他には、旅のお土産もおすすめです。昭和30～40年代に流行した、とてもかわいい土産こけしや貝細工など、今ではあまり見かけなくなったお土産もあり、どれも非常に興味をそそられます。

特に工夫したこと、苦労したことを教えてください

県内の名所の魅力や、鉄道などの交通機関の発達の歴史を知ってもらえるように内容を構成しました。また、むつ来さまい館では恐山の資料を、青森県立三沢航空科学館では懐かしい十和田観光電鉄の鉄道の写真・映像を紹介するなど、各地域に関連する資料も展示しています。

一方、駅弁や土地の名物を味わう、名所をめぐる、お土産を買うといった、旅の目的や楽しみ方、思い出は人それぞれ異なります。皆さんの旅のイメージにつながるよう、近世の旅、鉄道の整備といった旅の歴史に触れるとともに、懐かしい思い出に浸り、新たな旅の魅力を感じられるような展示にしました。

来場者の感想、反応はいかがですか

県内の旅に関することを多方面から知ることができて新鮮だった、という声をいただいたり、会場で懐かしい写真やお土産に長い時間見入ったりする来場者の姿も見られました。また、地元で県立郷土館の展示を見ることができて嬉しいなどの感想もいただき、多くの方から好評をいただいています。

（巡回展担当・滝本）



旅のおとも・旅のみやげ



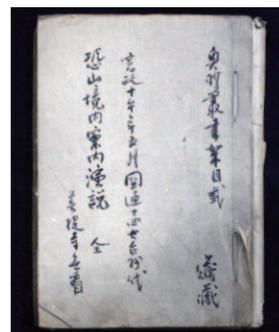
昭和期の駅ホームを演出してみました

巡回展「あおもり旅ものがたり」関連事業 講演会 ― 恐山 近世地獄巡りの旅 ―

巡回展「あおもり旅ものがたり」の関連事業として、むつ市会場（むつ来さまい館）で9月3日（土）に講演会を開催しました。

当館歴史分野担当佐藤良宣と民俗分野担当小山隆秀が「恐山―近世の地獄巡りの旅」と題して行った、恐山信仰についての一般向け講座です。これは、今年3月に佐藤・小山が共著で発表した「恐山史料の再発見」（『青森県立郷土館研究紀要』第46号2022）の内容をわかりやすく、90分にまとめて紹介するものでした。まず、冒頭で小山が「恐山信仰のあらまし」について、恐山信仰の概要とこれまでの研究史を紹介しました。次に佐藤が「近世恐山の地獄巡りの実態」として、近年再発見され、翻刻した近世史料「恐山境内案内演説」（寛政10年・1798）をスクリーンに大きく投影しながらていねいに解説し、18世紀末当時の恐山地獄巡りの実態を紹介しました。この史料を初めて見る方も見られ、興味深そうに解説を聞いていました。最後に小山が「近現代の恐山信仰」について、明治期から現代までの恐山信仰の様子と今後の研究課題を紹介しました。

当日は、普段から恐山にお参りしている地元の方々や、郷土史を研究されている方々も聴講されていたため、その経験や情報もお聞きしながら講座を展開することができ、講師を務めた我々にとって学びの多い有意義な機会となりました。御礼申し上げます。さらに研究を進めて新しい知見を紹介できるようがんばります。ご期待ください。（民俗担当・小山）



「恐山境内案内演説」
寛政10（1798）年



会場の様子

新収蔵資料紹介 県重宝 亀ヶ岡式土器

考古常設展示室で展示していた借用資料の県重宝亀ヶ岡遺跡出土土器3点が寄贈されました。

これらは製作されてから約2000年以上経ているとは思えないほど、良好な状態で残っています。中でも彩色された壺形土器（中央）は優品。黒漆を表面全面に塗り、その上に赤漆で文様が描かれています。文様をよく見ると描いた際の工具【刷毛か】の痕跡があります。描いた順序や使用した道具が推測できます。作者の息づかいまで感じとれるようです。この壺の底部は円形ではなく正方形であるもの珍しい特徴です。左の壺形土器は、細い縄文を矢羽状に巡らし、口縁部がよく磨かれ光沢のある黒色をしています。右の浅鉢形台付土器は、口縁に6個の突起があり、外面には沈線で変形工字文が描かれています。外面だけでなく浅鉢の内部も丁寧に磨き上げられています。

いずれも小振りですが各時期の土器の特徴をよく捉えたものであり、当時の緻密な土器づくりをうかがえる逸品です。考古学だけでなく芸術作品としても優れた資料です。（考古担当・杉野森）



左) 亀ヶ岡式壺形羽状縄文土器
縄文晩期 最大径9cm 高さ6.5cm



中央) 亀ヶ岡式壺形彩色土器
縄文晩期 最大径10cm 高さ9.5cm



右) 亀ヶ岡式浅鉢形台付土器
弥生前期 最大径19cm 高さ11.2cm

